

ジャズ・ウィルス？

加藤雄二

あるとき、小林秀雄の「私小説論」にジャズへの言及があることに気づいた。小林は、長い歴史を持った日本人の民族性を西欧のクラシックに親しいものとし、ジャズをその対極に位置づける。伝統によって培われた日本人の耳はクラシック音楽に「より多くの純粹な音を聞きわけている」のであり、日本人は必然的にジャズよりもクラシック音楽を好むのだとされる。ジャズを「純粹な」芸術と対置し排除することが、小説を定義するために必要とされたらしい。

アメリカのノーベル賞作家トニ・モリソンが、講演集『白さと想像力』で類似例を取り上げている。モリソンによれば、ジャズには独特の「文化的連想」があるらしく、序文で紹介されるフランスの作家マリー・カルディナルは、ルイ・アームストロングの即興演奏にゴシック建築の荘嚴さを聴きとり、ルイが悪魔でもあるかのように「憑依」される。ルイの演奏に性的興奮を覚えた彼女は、出産や「黒

い母親」のイメージに密かに囚われ、白人女性としてのアイデンティティを破壊される。モリソンは、ジャズが西欧的なアイデンティティを破壊させる“disabling virus”であり、西欧的なアイデンティティにとって極めて危険な要素であることを教えてくれる。しかし、ジャズや有色人種が同時に、ヨーロッパ的アイデンティティが成立するための必要条件でもあることが、カルディナルの治癒の経緯から理解されるのである。

昨年のノーベル賞受賞者カズオ・イシグロの処女作『遠い山なみの光』は、同様の装置を日本とヨーロッパの関係の表象に利用している。戦後の長崎の騒乱を逃れ、イギリスでイギリス人と再婚した日本人女性の、日本生まれの娘の自死が作品の語りの発端となる。内なる他者とでもいべき娘の死は、イギリス人として暮らす女性のアイデンティティを支えるために不可欠なのである。代表作『日

名残り』の執事は、貴族の屋敷の内部にあつて貴族を支えながらも、貴族の身分から排除されたもののことであるし、話題作『わたしを離さないで』が、オリジナルの人間たちの身体的完全性を保つための臓器提供を使命とするクロール人間たちを描いたのは、奇をてらつたSFへの意匠替えなどではなく、イシグロの本来的なテーマと装置が顕在化したものだ。

イシグロが元音楽家志望でありジャズ愛好家でもあることも、おそらく偶然ではない。あるインタヴューで「ポストモダンリズム」について問われ、イシグロは「ポストモダンリズムについてはあまり知らないけれども、ジャズについてならたくさん知っている」と、とぼけた答えを返し、ジャズの重要性をナンセンス風に認知した。しばしば伝統的と評されるイシグロの文学は、アイデンティティと他者性を階層構造的に捉えた小林や、『不協和音』などの著作で、やはりジャズに否定的な評価をくだしたテオドル・アドルノらに代表されるモダンな立脚点から遠く離れ、ラディカルな現代的地平に到達している。

では、ジャズを知るにはどうしたらいいのか？ おそらくベストと言つてよいイントロダクションは、マイルス・デイヴィスのベストセラー・アルバム*Kind of Blue*を聴き、マイルスの自伝*Miles*を読むことである。*Miles*は「ブ

ルースが奴隷たちの悲しみの産物であると説明したジュリアード音楽院のインストラクターに、ブルースは形式なのだとマイルスが抗議したエピソードが紹介されている。知的なものと情緒的なものを階層構造的に分割し、黒人の音楽と歴史を情緒的なものとのみ定義づけようとすることは差別であり、若いマイルスはそれに抗議したのだろう。「モード・ジャズ」と呼ばれる革新的な方法で西欧的なコード進行の束縛から逃れようとしたマイルスの*Kind of Blue*は、知的な形式であると同時に情緒的な、現代芸術の極限的到達点の一つとなっている。規範から逸脱することも芸術の必要条件なのだ。少し大人になった気分、その美しさをゆつくりと鑑賞してみたい。

かとう・ゆうじ 総合国際学研究院教授 アメリカ文学／文化

文献案内

小林秀雄「私小説論」『小林秀雄全作品』新潮社、二〇〇三年

Toni Morrison, *Playing in the Dark: Whiteness and the Literary Imagination*, Vintage, 1993 (トニ・モリソン『白さと想像力—アメリカ文学の黒人像』大辻淑子訳、朝日選書、一九九四年)

Kazuo Ishiguro, *A Pale View of Hills*, Faber & Faber, 2010. *The Remains of the Day*, Faber & Faber, 2010. *Never Let Me Go*, Faber & Faber, 2011

テオドル・アドルノ『不協和音—管理社会における音楽』三光長治・高辻知義訳、平凡社、一九九八年

Miles Davis, *Kind of Blue*, COLUMBA, 1959

Miles Davis and Quincy Troupe, *Miles: The Autobiography*, Picador, 1990